

A・ジョティシユキ―著  
森田安一訳

## 『十字軍の歴史』

(刀水歴史全書 86)

刀水書房 二〇一三・一二刊  
四六 四六八頁 三八〇〇円

本書は、ランカスター大学歴史学科教授ジョティシユキ―氏の著作 Andrew Jotischky, *Crusading and the Crusader States*, London 2004 の森田安一氏による全訳である。序文で述べられるように、著者は、多様化する十字軍の定義とそのナンバリングに関する論考を顧慮し、聖地だけではなくスペインからバルト海沿岸地域に至る広範な地域の事例を網羅することに努めている。そのため、十字軍運動における諸事件を詳らかにすることには主眼を置かず、より幅広い視野のもとで、その全体像の包括的な分析がなされている。

第一章は、十字軍研究における三つの問題（十字軍の定義、十字軍士の参加動機、聖地における植民地主義）について、近年飛躍的に発展した研究動向を踏まえて考察している。第二章では、十字軍運動の背景を教皇庁と十字軍士の動向および東地中海情勢を総合的に分析し、続く第三章は第一次十字軍とその経過、第四章は十二世紀後半までの十字軍国家の動静を扱う。

第五章「イスラームの反応」ならびに第六章「十字軍社会」は、

筆者の研究成果を反映した議論を展開している。前者はムスリムによる十字軍の理解と衝撃から、一一三〇年代から九〇年代にかけてジハード理念が復活してゆくまでを概説する。後者はフランス人が東方に築いた社会の性質およびムスリムとキリスト教徒との関係を明らかにする。特に、近年の考古学的発見に基づいた十字軍芸術についての言及や、聖地における宗教生活についての見解は特筆すべきものである。

第七章と第八章では、十字軍運動の多様性を考証する。まず、一一八七年のエルサレム王国の陥落を契機とした新たな展開として、インノケンティウス三世による十字軍運動の理念と実践に焦点を当て、アルビジョワ十字軍や統一十字軍の事例を取り上げる。次章では、中世において十字軍運動の理念が適用された聖戦として、スペインにおけるレコンキスタ、北の十字軍、「政治的十字軍」、一一〇四年にフランク人国家が創出されたギリシア世界の事例分析がなされる。

第九章では、十三世紀における十字軍運動の変化として、新たにエジプトを目的地としたフリードリヒ二世と聖王ルイの遠征、エルサレム王国の王位継承問題が論じられる。第十章では、後期十字軍と題し、アッコ陥落後の十字軍諸国家の分裂とその後の西欧世界を俯瞰する。社会情勢の変化による十字軍運動の諸困難とともに、十三、十四世紀以降の教皇庁や「聖地回復論文」に見られる聖戦への熱意と反省、そして中世後期の人々の心性における聖地のイメージが検討されている。

本書は、十字軍の理念や起源に関する議論にとどまらず、さま

さまざまな複線的な要因と絶えず変化する同時代的な動向の中に位置づけられる十字軍運動の実像を見事に描いている。著者は、十字軍について学ぶということが西欧社会の社会構造を研究することとし、今日の十字軍研究を学際的であると位置づける。訳者の森田氏の心遣いにより、本書は年表や図表の付録が充実しており、専門家でなくとも読みやすい。ぜひ、多くの方々の手に取って頂きたい。

(関沼耕平)